

明日への伝言

荒浜小学校の震災発生時の様子や震災遺構としての役割について、職員の川村孝男さんと高山智行さんにお話を伺いました。



※開館状況についてはお問い合わせください
 震災遺構仙台市立荒浜小学校 ☎ 355・8517

第2回 震災遺構 仙台市立荒浜小学校

太平洋沿岸から約700メートル内陸に位置する荒浜小学校には、震災時、児童や教職員、住民ら320人が避難し、校舎の2階まで津波が押し寄せました。現在は校舎を震災遺構として公開し、津波の脅威や教訓を後世に伝えています。



訓練を生かし、校舎上階に急いで避難

震災当時荒浜小の校長を務めていた川村さん。「地震が発生した3月11日の午後2時46分は、ちょうど2・3年生の下校時間でした。校長室の窓から、校庭でうずくまる子どもたちを先生たちが必死に両手で抱え込む姿が見えました」。停電で情報収集が困難な中、保護者や地域住民が次々学校に集まります。日頃から津波を想定した避難訓練を行っていたため、校庭ではなく4階に、その後屋上に避難させました。

荒浜小を津波が襲ったのは午後3時55分。「私は2階に居たのですが、海側の窓が突き破りがれきを含んだ真っ黒い水が襲ってきたため、急いで逃げました」。周囲は水没し、学校は孤立状態に。雪がちらつき寒さが増してくると、3・4階の教室に移動しました。「救助を待つ間、お互いに励まし合ったり、理科の授業で



▲高山さんが代表を務める「HOPE FOR project」のイベント（※）で作った電球に明かりをつけ

安心して帰れる、未来につながる場所

現在、荒浜小には県内外から多くの方が訪れています。公開当初から見学者の案内を務める高山さんは「荒浜小には二つの役割があります。一つは、震災遺構として震災の脅威や教訓を伝える役割。人と人との触れ合いの中で伝えることを大切にしています。もう一つは、荒浜に住んでいた方が安心して帰れる場所として

たりする子どもたちの姿に希望を感じるとともに、この子たちを必ず助けなければと思いました」と川村さん。辺りが真っ暗になった午後5時半、自衛隊による救出作業が開始。低学年の児童からヘリコプターで一人ずつ助け出す作業が夜通し続きます。翌朝水は引き、全て流された周囲の惨状に言葉を失いました。午後6時、全員の救出が終わります。「校庭から見上げると校舎が夕日で光っていて、320人の命を救ってくれた荒浜小にありがとうと言いました」。荒浜小は、平成28年に閉校。震災遺構として整備を進め、平成29年4月に公開されました。

ての役割です。かさ上げ道路の整備など、ハード面の復興事業はほぼ完了しましたが、心の面での変化は一人一人違い、復興という言葉では語れません」。震災の翌年から毎年3月11日には、亡くなった方をしのび思いをはせるイベント（※）を荒浜小で開催。「卒業生や地元の方との触れ合いを通し、今でも荒浜を大切に思う方がいることを心に留めておかなければと感じます。3・11が点として終わらず、線となって未来に続くことが必要です。悲しみだけでなく、震災前の荒浜の豊かな暮らしや文化も伝え続ける、誰にでも開かれた場にしたい」と語ります。

川村さんは「荒浜を、津波を連想させる怖い場所と思う方は少なくありません。しかし、自然に恵まれ、にぎわいのある荒浜を取り戻そうとする住民もいます。ここが防災・減災を考えるきっかけとなることで、明るい未来につながり、希望が持てる場所となることを願います」と話します。高山さんは「若い人たちが震災の記憶を伝える活動に関心を寄せてきています。次の世代に活動をつなげていきたい」と未来への思いを話してくれました。



▲高山さん（左）と川村孝男さん（右）

